【ねがいましては】

平成２２年１月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２３１号

「お母さんに会えてよかった」

「さあやるぞ！」希望に満ちてスタートする学校生活、それまでの生活が子どもたちをそれぞれのスタート地点に立たせます。すでにひらがなやカタカナなどを習得している子、数字も読めるし書ける、その結果相当の自信家になっている子。

幼稚園や保育園などで、すでに負け組になっている子もいます。けんかや遊びの中での順位などで自分は後方の部類に属するのだと感じている子もいます。

すでにスタート位置が様々になっています。

今掲げた二通りの子の心の中を少しのぞいてみましょう。彼ら自身がもちろん言葉では論ずることなどできるはずはないのですが、こころの中には感覚として受け止めているものがあるはずです。それが行動に出ます。

前者、成績というものに当てはめますと、かなり良いスタートが切れるようです。先を知っていることに優越感を覚え、スター気取りな気持でいられるかもしれません。その反面、とても危険な要素を持っていることを親は知っていなければならないと考えます。「ぼく知ってるよ。」「わたし知ってる。」などの知っている言葉です。これ実はかなり周りの子を傷つけてしまう言葉なのです。単純に「知る・知らない」は、子どもたちの中では勝ち負けにつながりやすくなります。負けたくないあまりに、つい口が先走ってしまいます。この時点で弱気になっています。おれは強いんだバリア作戦。

その結果、負けることにとても敏感になります。負けたり失敗することで、その時のショックが親の思っている以上に大きくなると思われます。また、本人も、そのかっこ悪い自分を悟られたくないという自己防衛本能により、実際にはショック状態であっても、外面では表情を変えないようにと努力します。しかしそこは子ども、眼をぱちぱちさせたりしながら、泣かぬようにと頑張ってみたり・・・。自分のことだけで精一杯なのです。その後の気持の処理にも危険が潜んでいるかもしれません。他人のせいにしてしまうという現象です。自分の負けを自分せいだと認めたくないのですね。ショックを小さくするための策です。心の幅がかなり狭くなっていることにお気づきでしょうか。

後者、すでに敗者の気持ちを持っています。けんかで負けた。遊んで負けた。どうやら自分は勝者にはなりにくい性分だ。勝つことにはさほど関心をよせなくなるかもしれません。それよりも仲良く遊ぼう・・・！一緒に何かをしよう！仲良くするには相手に合わせる必要が出てきます。相手の心を覗く必要が出てきます。目の前の子が楽しそうにしている、良かった。私も楽しいな・・・ひとの喜びを自分のものにします。協調性が培われます。さらに他人を思う気持ちを持ち始めます。思いやりの芽生えです。

中にはそこまで心が動かずにいる子もいます。流れに身を任せていればいい。全体把握がいかず、自分がどのような立場であるかわかっていません。初詣の中を、ただ身を任せて進んで行ったら、いつのまにか社殿前に出ていたようなものです。このタイプは、初期から命令だけで生活してきた子に多いと思われます。

子どもたちは必死に考えています。しかし未熟な心の発達は、知らぬうちに思ってもみなかった判断をさせてしまうのかもしれません。そんな心のシグナルを敏感に感じ取ってあげなければ健康的な心の成長は望めないでしょう。

子のこころを感じ取ること、それが日々の家族との触れあいになります。子どもに必要なものは安心感、それを安定して持続させること。子のこころが徐々に丈夫になっていきます。何が起ころうともぼくには家族がいる・・・。こころに広がりができ、少しの余裕が生まれます。他へ気を配る余裕です。他人を思う気持ちです。思いやりにつながる大切なこころなのです。

勝ち負けであふれる社会、せめて勝ち負けのない安心できる空間があれば・・・。そう子どもたちは感じています。言葉には発せない心のシグナルです。

毎日受け取る家族からの安心感、それはお金でも物でもない、家族からの一言かもしれません。「・・・・・。」「しあわせ」というものに照らし合わせてみたら、はたして常に勝者であることが必要なのでしょうか。

子が春の野原で花を摘み、そっと人に手渡す花。その光景を見、心を温める親・・・。

この子に会えてよかった。

学校でのテストを恐る恐る見せる子、受け取るや否や、ニコッと微笑み「あなたもお母さんの子なんだね。」

「さあ、いっしょになおそう！」

お母さんに会えてよかった。

こんな気持ちを伝えたい・・・・。わたしは親ではないのだけれど、子どもたちに感じてもらいたい。毎日、現実の中で押しつぶされそうになりながら必死に生きる子どもたちよ、周りに温かいものをいっぱい配ってね・・・・・・・ありがとう。